

倫理と文化が 企業を長期に発展させる

東京大学名誉教授
月尾嘉男



経済至上主義の盲点

紀元前九世紀、現在のチュニジアに該当するアフリカ北部の海岸にカルタゴという国家が誕生した。海上貿易により発展し、紀元前三世紀には地中海南半分を支配し、北側のローマと対峙する勢力となる。しかし、両雄並立せずの言葉のように、両者は三回のポエニ戦争を対戦し、ローマが三度も勝利して、紀元前一世紀にカルタゴを滅亡させる。それは一九世紀まで、カルタゴの所在

場所さえ特定できないほどの徹底した破壊であった。

後世、強国カルタゴが消滅した原因が研究されるが、ある歴史学者が「カルタゴの歴史は文明の浅薄さと脆弱さを明示している。それはカルタゴ国民が財力の獲得だけに血道をあげ、政治・文化・倫理などの進歩をめざす努力をしなかったことである」と記述している。カルタゴには、古代ギリシャの哲学、古代ローマの法制に相当する後世への文化遺産がないとされるが、それが国家滅亡の

原因である理由が筆者には理解できなかった。

ところが最近の巨大企業に頻発する社会問題により、歴史学者の言説の意味を理解することができた。粉飾決算により業績を糊塗する企業、

過剰な設備投資により経営破綻する企業、製品の性能を捏造して公表する企業などが次々と登場している。いずれも短期の金銭で測定できる企業価値は増大したが、結果として、事業の一部を売却する、企業全体が外資に買収される、製品の売上が急落するなど、長期の企業価値を毀損している。

利益本位を抑制する倫理や文化

これらが証明するように、財力の追求には重大な欠陥がある。この四月に日本を訪問したウルグアイのホセ・ムヒカ元大統領に「社会は貧乏を誤解している。貧乏とは際限のない欲望をもち、いくら富裕になっても満足しないことである」と喝破した名言がある。金銭は単純な数字であるため設定しやすい目標であり、それを企業価値とすれば、ひたすら増大させることにならざるをえない。そのために不正が横行するのである。

そのような行動を抑制するために人間が発明したのが、倫理や文化で

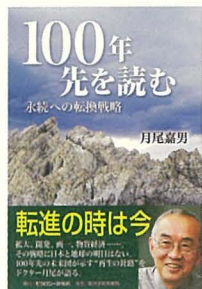
ある。日本は長寿企業が多数存在する希有な国家であるが、それらに共通する特徴は、近江商人の「三方よし」が象徴するように、自社の利益だけを追求しないような家訓を保持してきたことである。ある老舗企業の家訓に「あらゆる活動において創業一族の利益を優先させること」とあり驚愕したことがあるが、その企業は第六代経営者の蕩尽により衰退した。

企業の社会責任は利益ではない

それが国家規模で出現したのがカルタゴの消滅であるが、さらなる問題は傭兵であった。往時のカルタゴの人口は推定二〇万人でしかなく、軍隊は周辺の先住民族を傭兵としていた。傭兵の目的は金銭であるから国家のために戦闘する意欲は希薄である。これがカルタゴの敗戦に影響する。世界七八か国を対象にした「世界価値観調査」によると、自国のために参戦するかという項目で、日本は最低の数字であり、往時のカルタゴを彷彿とさせる。

最近、企業が非正規雇用者を増加させている。日本では男性で二割、女性で六割にもなる。企業にとっては正規社員より安価に雇用でき、業績に比例して調整可能という利点があり、雇用される人々にとっても柔軟な労働形態を選択可能という利点があるが、企業の文化や倫理を継承していくという視点からは疑問である。非正規雇用者は賃金のために労働するのであり、企業の倫理や文化を醸成することに関心はないからである。

企業の社会的責任（CSR）という概念がある。一七世紀に世界最初の株式会社が登場したとき、目的は株主の利益のみであった。そのため社員福利の軽視、地域社会との軋轢、地球環境の破壊などの問題が派生し、企業活動によって企業外部に発生する損失を考慮する活動が要求されるようになったのが企業の社会的責任である。これは一見、企業の経済活動を阻害するようであるが、企業が永続する倫理や文化を保持するための仕組みなのである。



絶賛発売中!!
ご注文は添付のハガキで